

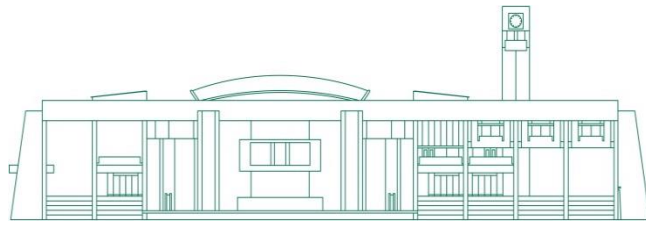
大学の現場から見た現行の会計制度の課題認識

お金が足りないと言いながら、
損益計算書では利益が計上されるという問題意識

東海国立大学機構 名古屋大学

副総長

木村彰吾

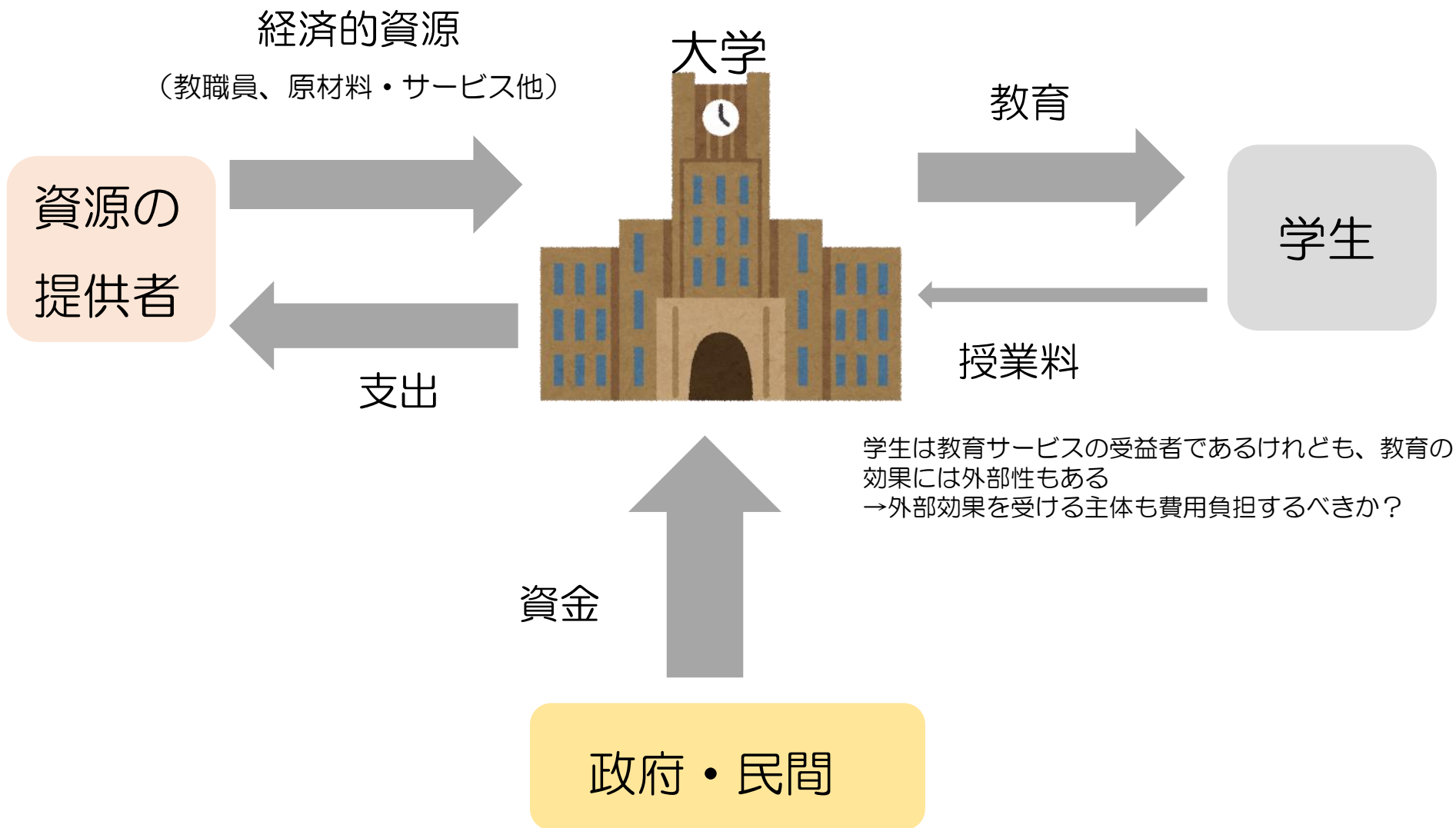




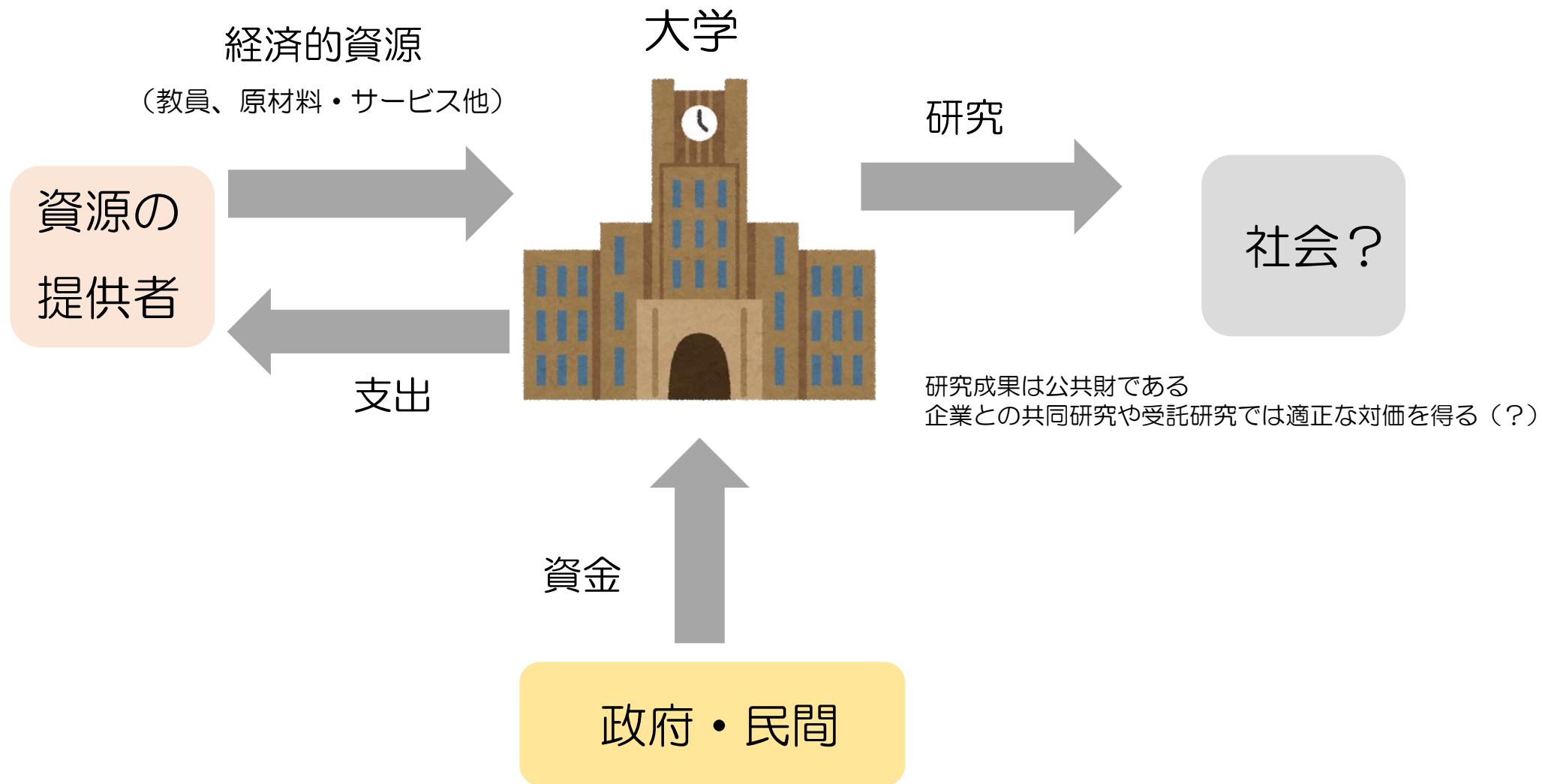
1 大学の予算配分の考え方

- 資金ショートを回避するよう収支予算を考えます。すなわち、収入見込額（学生納付金、附属病院収入、間接経費などの自己収入、および運営費交付金など）を所与として、当該収入で支出可能額を算定し、支出予算を編成します。
- 支出予算の執行に際しても、資金ショートを防ぐよう保守的に執行されます。
 - 資金ショートへの備えがない
 - 資産の維持管理が後回しになってしまう可能性

2 大学の教育・研究活動と資金のフロー (1)



2 大学の教育・研究活動と資金のフロー (2)





3 大学の現場から見た現行の会計制度の課題認識

- 2で示されるような教育・研究活動をPL上で適切に表現して、ステークホルダーへのアカウンタビリティを果たせないか？
 - 教育・研究の損益とそれ以外の部分の区分表示
- 「現金の裏付けのない利益」（勘定あって銭足らず = 資金ショート）への対応をどうするか？
 - 会計処理：収益および費用の認識計上基準の見直し
 - 内部留保の可能性：経営体やゴーイング・コンサーンとして将来の支出への備え、さらには投資の原資